

第3回 北海道森林管理局国有林材供給調整検討委員会

(概要)

先般開催した、令和4年度 第3回北海道森林管理局国有林材供給調整検討委員会の概要について、次のとおりお知らせします。

1. 日時

令和4年 12月 19日(月) 13時 30分～15時 30分

2. 会場

北海道森林管理局 3階 大会議室

3. 主な意見等

○ 森林組合では、現在例年どおり間伐事業と主伐事業を並行して実施している。一部雨の影響もあったが、秋植えも含め事業は順調に推移してきた。山側の原木状況は運材車不足により、一部運材が滞ったところもあるが、概ね順調に推移しており、原木在庫については例年より若干少ない。材価の値上がりを受け、例年より主伐が若干多く、製材合板向けが増えている。合板工場のトドマツは一部入荷制限しており、納入時期等を伐採前に相談しながら事業を進めている。製材工場の原木在庫は減少傾向であり、樹種を問わず原木集荷に不安がある。今後の素材生産動向については、製材合板向け原木の受け入れ状況や単価次第とみている。極端な単価下落があれば植林地を確保している地区は伐採施業をセーブする等するところもあるのではないかと。

○ 事業体に行った 12月のアンケートでは、木材価格について、8割の業者がコロナ前より上昇している、2割の業者が変化がないと回答しており、北海道は本州ほどコロナ以前からの変動が少なかったと感じている。生産量は当初計画量をほぼ確保できる見込みである。増産については、2割弱の業者が少し増産可能、7割の業者が横ばいで今は難しい、1割の業者は減産になるという結果であった。理由として、人手不足が半分を占め、他に燃料価格の高騰、重機の不足等があげられている。

本州のバイオマス発電所が価格が合わないため稼働を止めてしまうという話があるが、北海道も今後どうなるか心配している。原料の末木枝条を現地調達するのが一番良いが、運搬賃も含め手間がかかるため、採算が合わない物を集材しないと末木枝条の増産は難しいので、何か配慮があると集めやすい。

○ トドマツについて合板工場は注文があるが、建築材は少しずつ落ち込んで弱含みである。原木についても先行きは弱いが、大きな変化はない。カラマツについて、梱包・パレットは安定しているが、構造原料は依然不足している。カラマツラミナは輸入材と比較して年明けから梱包材を下回る価格になりそうな状況である。原料材関係では大幅な価格変動はない。

北海道からの移出合板用丸太は、米松丸太の価格の低下、住宅着工の落ち込みなど弱含みのマーケットだが、今のところ大きな変化はない。

道内に入荷した輸入製材は、ウクライナ侵攻からの危機感による追加発注のピークは過ぎたとこ

ろである。プレカット工場の稼働率は7割程度と思いのほか落ち込んでおらず、来年も含めて大きな落ち込みはない見込みである。

輸入材の産地価格はピーク時の6~7割で、為替の影響により価格は依然高いが、ピーク時からm³単価3万円ほど下がる見込みである。

- 今年度の道有林の立木販売は、昨年度当初の計画量の一割増を予定しており、11月末現在の進捗で83%473,000 m³を販売している。入札の執行状況については11月末現在で88物件234,000 m³を販売している。11月時点の市況調査の結果について、エゾマツ・トドマツは全道的に順調に入荷して、在庫不足は解消されているが、道央圏では不足しているという声がある。カラマツについては依然として原木不足が続いているが、一部地域では順調に入り始めているといった声もあり、状況に変化が少し出てきている。製材の動きは樹種、地域問わず引き合いが弱まるのではないかといった懸念の声が出ている状況である。
- 道内製紙工場では輸入チップや古紙が足りないため、比較的国産材の調達が目処がつく北海道での生産を例年検討しているが、製材工場の操業が減少し、10月以降10~15%程度の背板の減少、バイオマス発電所の使用する木材との競合、地域によっては合板の低質材など丸太のパルプ材の格上げ使用もあり、原料材がこの数年で減少しているため、既存チップ工場の操業ができなくなってきている。このままいくとチップを使用しないダンボール等の生産に特化する恐れも出てくる。今後も継続して国有林の原料材の生産をお願いしたい。
- 弊社の製材工場の原木在庫は1週間程と、原料不足が継続している。今後の入荷によっては生産調整の可能性もあると心配している。一方で、他の製材工場から入荷した原板については、土場に置ききれない量が入荷されている。原板を乾燥して加工するという流れで、乾燥が追いつかず、原板の消費が進まない。
今年度国有林からの丸太の生産が増えているが、人手不足の関係で出材が増えていないと感じられる。需要はタイミングがあり、実際の需要に合わせた供給が必要である。材が欲しい時になかなか手に入らない。新たな需要に供給がまだ追いついていないと感じられる。需要に合わせた国有林材の供給は難しいため、どのようにカバーするかを業界全体で考える必要がある。
今後入荷する原木価格が高くコストは上がるが、事業は停滞しており、採算が厳しくなりつつある。11月に収支がマイナスになり、来年3月までその傾向が続くのかと心配している。
- パレット・梱包材について、価格はほぼ横ばいで推移していたが、10月頃から数量が少しずつ落ちてきている。コロナにより中国向けの輸出が不調であること、自動車関連の部品調達が芳しくないことから生産量が落ちたためである。また製材工場の仕事が減少してきたため、以前は2ヶ月だった納期が2週間前後と早くなり、その分在庫を減らす動きとなり、発注量が自動的に減少している。
先行きの見通しとして、ウッドショック前の急速に価格が落ちて仕事がない状態にはならず、来年の上期で一定の収束をするという見方を立てている。世界的に荷動きが在庫過多ということで良くない状況だが、物流自体は世界的に困っているわけではない。絞り込んだ在庫を再び通常軌道に戻していく中で、入荷が芳しくないことから、品不足がどこかの時点で起きるのではないかと心配している。

全道の一般カラマツ製材工場で平均的に在庫が少ないが、在庫が少なくても回すすべを得たことから、在庫は少なくても良いという考えを持つ工場もかなりあると思っている。製材工場の買い意欲は高いが、高い材を買う意欲がないため、原料在庫状況と市況がミスマッチになっている。製品価格が軟化傾向にあるだけに余計に冬期は、その動向が継続するのではと心配している。

○弊社のバイオマス発電所では、FIT 制度により収入は一定だが、最近では原料となる原木の調達額や輸送コストが上がっている。また社内電力は高圧電力で、逆に電気を買っており、電気料金が毎月のように上昇し、収益は悪化している。FIT 制度は 20 年同じ単価だが、発電所の買取価格を見直してもらわないと厳しい状況である。在庫については、ウッドショック前は半年を切ったが、ウッドショックから少し増えてほぼ 10 ヶ月の在庫になっている。林地未利用材を3,4割集めているが、細長い形状のチップのため、発電所側の搬送経路を工夫しないと引っかかる。また林地未利用材を使うと異物混入が多いことから灰の量が増えるので、その分負担が増えるが、工夫するとある程度阻害状況を除外できる。発電所以外でも使う側が工夫すれば豊富な森林資源を有効な形で使えると思っている。弊社のパーティクルボードは合板関係の代替えでまだ需要が伸びているものの、下期に入り頭打ちである。原料コストの上昇に備えて単価を上げたため、順調に収益が上がっているが、今後は値下げも含めて材価の下降をどう乗り切るかという状況にある。